

一貫教育校の広場

得点以上の価値があるトライ

●志木高等学校 教諭 平 益行
たいら やすゆき

2025年11月15日、志木高蹴球部は川越東高校を21対19で下し、初めての全国高校ラグビー大会（花園）出場の切符を手にした。40年間にわたって指導してきた竹井章監督の定年まで残り1年余りとなった年の快挙である。全国大会までに行けることは限られている。練習試合に加え、大学蹴球部との合同練習では特にコンタクトプレーに磨きをかけた。その成果について選手の一

人は「高校生が弱く感じる」と語った。12月27日、花園ラグビー場第3グラウンドで青森山田との試合は始まった。トンガ人留学生の大型バックスは脅威だが、最初に激しいタックルをすれば相手もひるむ。フランカー小池の強烈なタックルが留学生の巨体に突き刺さる。ペースをつかんだ志木高はモールで敵陣に押し込み、キャプテン浅野がディフェンスを弾き飛ばして先制トライ。一気に流れをつかんだ志木高は得点を重ね、48対12で初戦を突破した。

12月30日、2回戦の相手は鹿児島実業である。全国大会常連校に対して志木高はスクラムで圧倒。相手はモール対策を徹底しており、ボールを奪われる場面もあったが、ロックの橋本のトライで勢いづき、31対17で勝利した。両

試合を通じて、選手たちを後押ししたのは全国各地から駆けつけた“志木高応援団”である。選手たちがモールを組



積み重ねてきた日々の努力が実を結び、力強いプレーが花園の舞台上で花開いた

むと会場中に「押せ！押せ！」の聲が響いた。大阪で正月を迎えた志木高蹴球部の次の相手は高校日本代表候補7人を擁する東福岡高校である。一方、志木高蹴球部は登録メンバーのうち中学からのラグビー経験者は3分の1程度。スポーツ推薦のない志木高に入学する経験者は必ずしも経験豊かとも限らない。選手名鑑を開くと、ほとんどの出場校はほぼ全員が経験者である。志木高蹴球部はひたすら練習によって作られたチームなのである。

東福岡のプレーは圧倒的だった。強いだけでなく足も速い。スクラムやモールは練習すれば強くなるが、足が速いのは才能と言われている。7対68で迎えた終了間際、ロスタイムに志木高蹴球部はモールを組んだ。聖地花園の第1グラウンドで「押せ！押せ！」と応援の聲が響き渡る中、志木高蹴球部は高校生活最後のプレーをトライで締めくくった。初心者集団だった志木高蹴球部は東福岡からトライをとり、敗れはしたがベスト16に入った。14対69という結果は大差にみえる。しかし、土にまみれて練習を重ねた結果、手にしたトライはただの数字ではない。選手たちにとって一生の財産になったただでなく、観る者全てにとって勇気を与えるトライだった。